

おとうさんのアイフォン



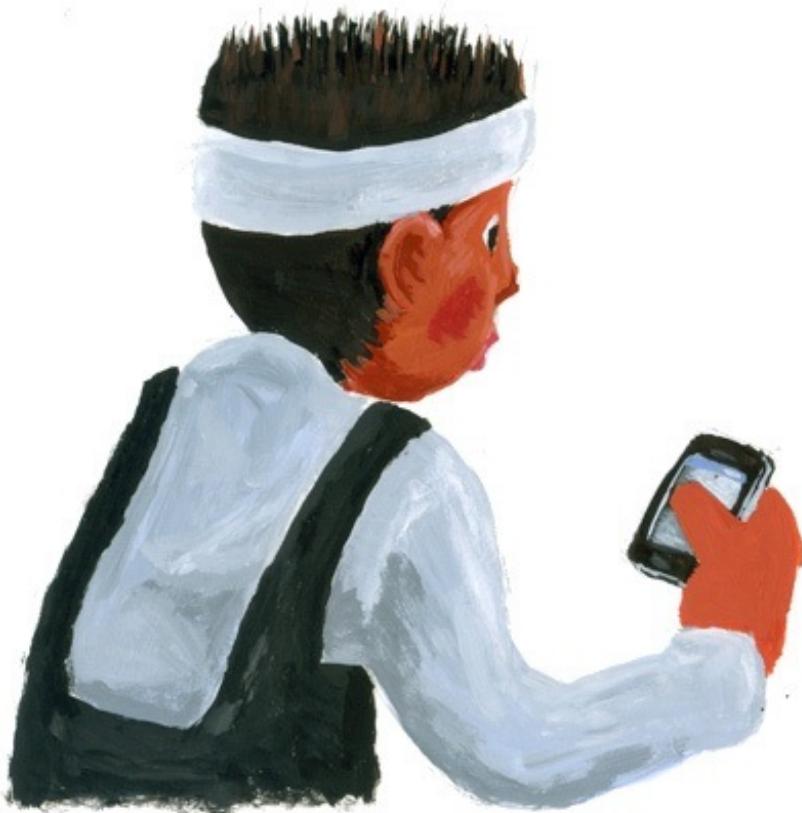
さかなや
ぼくのおとうさんは、魚屋さんだ。

まいにちあさはや いちば い
毎日朝早く市場へ行き、

さかな し い
いっぱいの魚を仕入れてくる。



おとうさんは時間じかんができると、すぐにアイフォンをいじる。
ふと 太い親指おやゆびを、ぐりぐりとこすりつけ、じっと画面がめんを見みている。



ちょっと前、キッチンのテーブルにおとうさんのアイフォンが

置き忘れてあった。ぼくはそれを手に取った。

なんだかとても、生臭かった。おとうさんの、手についた匂いだ。



ぼくはとってもいやになって、すぐに放り出した。

まいにち いちば さかな し い
おとうさんは毎日、市場で魚を仕入れ、
じかん み
あいた時間にはいつもアイフォンを見ている。



ある日、おかあさんが教えてくれた。

おとうさんは昔、「あいていー」の仕事をしていましたそうだ。

「おれの作ったサービスで、みんなを幸せにする」が口癖だったらしい。



さかなや
だけど、魚屋さんをしていたおかあさんのおとうさん、

つまりぼくのおじいちゃんがギックリ腰で働けなくなった時、

たの
みせ
あと
つ
頼まれてお店の後を継いだんだ。

「ほんとうにいいの？」とたずねたおかあさんに、
おとうさんは「今度は魚屋で、みんなを幸せにするんだ」って
わら笑っていたんだって。



きょう むかし しごと
今日はめずらしく、おとうさんの昔の仕事のなかまたちが

あつ えんかい
うちに集まって、宴会をしている。

みんながめいめいに、自分のアイフォンを見せ合って、何か話している。

そうしていたら、テーブルにたくさんアイフォンが並んじゃった。

だれ よ い
誰かが酔っぱらって言った。

だれ
「あれ? どれが誰のかわからなくなっちゃった」



ぼくはアイフォンに次々顔を近づけて、そのうちの一つを取り上げた。

「これがぼくの、おとうさんのアイフォンだよ！」

おとうさんが手にとって確かめた。

「ほんとうだ。よくわかったな」

みんな驚いていた。ぼくは自慢げに言った。



「おとうさんのアイフォンは、おとうさんの匂いがするから」

おとうさんは、うれしそうに笑ってた。

まいにちさかな し い
おとうさんは毎日、魚を仕入れ、そしてアイフォンを見ている。 み

